

國學院大學學術情報リポジトリ

神奈川県小田原市 下曾我遺跡出土曲物

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉橋, 裕真 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001931

神奈川県小田原市 下曾我遺跡出土曲物

倉橋裕真

1. はじめに

下曾我遺跡¹⁾は、神奈川県小田原市に所在する弥生時代後期から平安時代初期までの複合遺跡である。本遺跡は國學院大學による3回の調査ののち（赤星 1965、樋口ほか 1966・1967）、小田原市による調査が実施された（下曾我遺跡発掘調査団編 2002）。

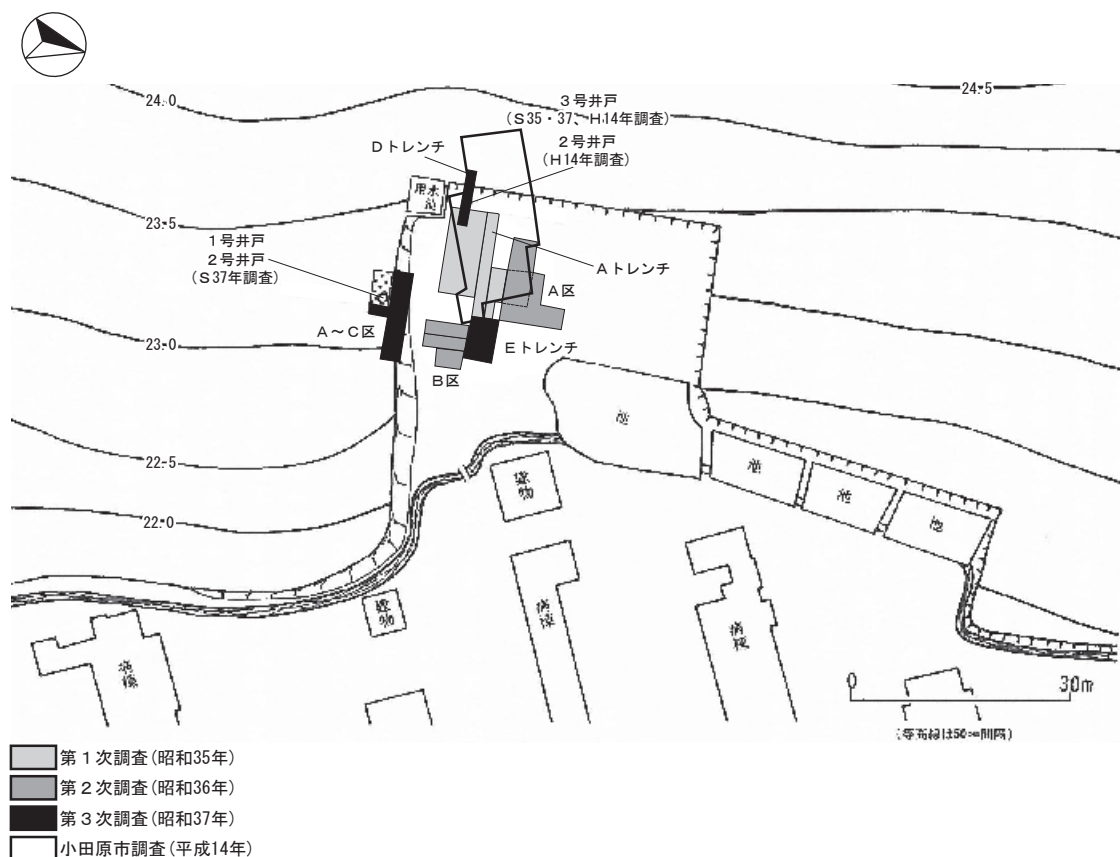
國學院大學博物館には、下曾我遺跡の第1次から第3次調査にかけての出土資料が収蔵されているが、それらの詳細な出土状況などは大方が未公表のままであった。しかし、収蔵資料の整理を進める中で、遺物に記された注記や発掘調査当時の写真などから、一部資料の調査年次や出土状況を復元することができた。そこで、本稿では、収蔵資料整理の一環として、下曾我遺跡から出土した土器・木製品などのうち、曲物を取り上げて、その年代的な位置づけについて考察する。

2. 下曾我遺跡の概要

周辺環境 下曾我遺跡は、神奈川県小田原市永塚小海端 332 に所在する。小田原市は、約3割を足柄平野が占め、周辺を箱根山地・丹沢山地・大磯丘陵に囲まれ、南東に相模湾が広がる。足柄平野は、中央に酒匂川が流れ、酒匂川とその支流により形成された沖積平野である。しかし、微地形として変化に富み、低台地・扇状地・自然堤防・砂丘などが入り組んでいる。足柄平野の東縁には、永塚・千代・高田の低台地が連なる。連続する低台地は、東西に走る浅い谷によって隔てられている。本遺跡は、この永塚台地の東隣に位置し、地下水位の高い部分にあたるため、木製品が遺存しやすい環境にある。また、



第1図 下曾我遺跡の位置（左：1/37500 右：1/50000）



第2図 下曽我遺跡の調査区 (下曽我遺跡発掘調査団編 2002 を加筆)

古代においては、官衙・寺院といった公的な性格が強い千代遺跡との関係が示唆される。

國學院大學の調査 國學院大學の調査については、当時の記録が少なく、全体の把握は困難であったが、岡本孝之氏が写真記録などから概況を把握している(岡本 2002)。本遺跡は、昭和34(1959)年²⁾に曾我病院の工事現場で出土した材木等が燃やされていたことを契機に発見された。赤星直忠氏は、この遺跡の重要性を認識して、官衙遺跡の実態解明を目的に、昭和35(1960)年に予備調査を含めた第1次調査³⁾をおこなった。調査区は東西15m・南北1mのAトレンチを挟んで南北に設定した。検出遺構は、3号井戸の上部であり、弥生土器片・土師器片・須恵器片・木簡などの木製品が出土した(赤星 1965)。

昭和36(1961)年には、樋口清之氏を中心に、集落の有無を目的とした第2次調査がおこなわれた。調査区は、第1次調査区の北側(A区)と東側(B区)に設定した。検出遺構は、奈良時代～平安時代の杭列、板材の集積遺構である(樋口ほか 1966)。

昭和37(1962)年には、3号井戸の再調査を含む第3次調査がおこなわれた。調査区は、第2次調査B区から南にやや離れてA～C区、第1次調査時に検出した3号井戸の西側にDトレンチ、第2次調査B区の北側に接したEトレンチを設定した。その結果、A～C区では1・2号井戸、Dトレンチから3号井戸や配石遺構、Eトレンチから弥生時代の木柵遺構を検出した。また、3号井戸が少なくとも8回以上にわたり造り替えられている事実も明らかとなった。遺物は、井戸跡内から延暦15(796)年鑄造の皇朝十二銭である「隆平永宝」銭1点・完形曲物側板1点・土師器片、包含層から弥生土器片・土師器・須恵器・陶器片・木簡・建築用材・曲物などの木製品が出土した(樋口ほか 1967)。

小田原市の調査 小田原市が担当する調査は、平成14(2002)年の社会福祉施設建設工事に先立つ発掘調査などがある。平成14年の調査では、國學院大學の調査で保存された3号井戸及びその周辺状況を確認することに主眼を置いた。調査区は、東西に長く面積が350m²で、國學院大學による調査区と重複する部分がある。検出遺構は、井戸址2基・曲物理設遺構1基・木組み遺構3基・土坑1基である。同調査における1号井戸は、昭和35・37年に検出した3号井戸と同一の遺構である。本井戸では、掘方や最下面から粗雑化が進んだ相模型土師器坏が出土しており、9世紀末頃から10世紀前半⁴⁾に相当する(田尾 2002)。2号井戸は、3次調査で確認された2号井戸とは別の遺構であるが、掘方から8世紀初頭頃に位置づけられる土師器・須恵器が、包含層から土師器・須恵器・陶器・下駄・横槌・曲物などの木製品が出土している。

3. 下曾我遺跡出土曲物

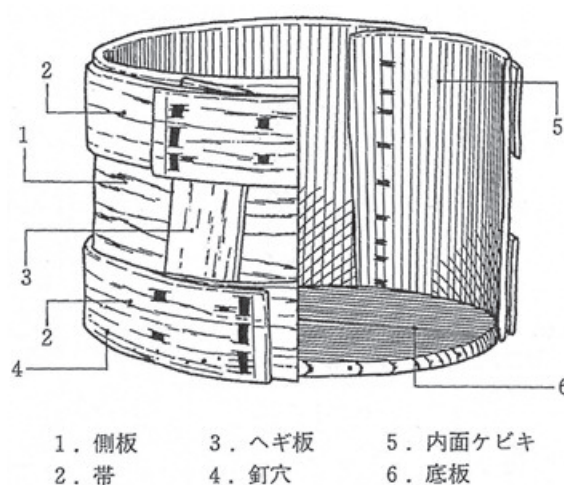
(1) 曲物の先行研究

曲物は、長方形の薄板を曲げて作った側板に、底板あるいは蓋をつけて容器としたものである。一般に、樺皮で結合したものを蓋、釘で結合したものを底板と区別している。

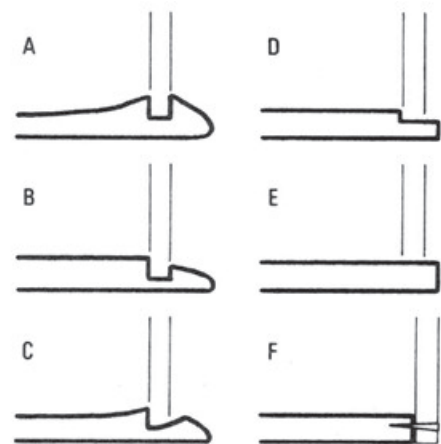
曲物の研究や報告は、民俗学・民具学・考古学の各分野からなされている(西村 1994、南 1991)。そこで、以下の先行研究から曲物の分類・機能を把握し、資料報告をおこなうこととした。

分量・形態・機能 南博史氏は、中世絵巻物から曲物の形態を分類し、考古資料の実態と併せて機能を推定した(南 1991)。曲物の機能は、口径16~20cmの小型品が「水用」、口径26~30cmの小型品が「食物用」、口径38cm以上の中型・大型品が「運搬用」に区分できることを指摘した。機能と形態は一定の関係を有する。

底板や蓋の形態は、周縁部の加工から、以下の6種類に区分できる[第4図](奈良国立文化財研究所編 1993)。周縁上面を隆起させ、そこに溝を彫り込みはめるA類。周縁に溝を彫り込み、側面に丸み



第3図 曲物の構造と各部名称 (西村 1994)



第4図 周縁部の形態模式図

(奈良国立文化財研究所編 1993)

をもつB類。周縁部を段上に削り込み、側面に丸みをもつC類。周縁部に段を設けるD類。周縁部に段を設けないE類。そして、底板が平坦で釘で固定するF類に分類できる。主にA・B・F類は釘で固定するため底板、C・D・E類は樺皮で固定するため、蓋となる。A・B類の底板は古墳時代に特有な形態である。8世紀以降の曲物では、F類の底板が主流で、C・D・E類の蓋がみられる。

結合方法 側板と底板との結合方法と、樺皮の綴じ方の変遷については、奈良国立文化財研究所と西村歩氏の研究に詳しい(奈良国立文化財研究所編 1985、西村 1994)。側板と底板・蓋の結合方法は2種類が認められ、樺皮で結合した蓋と、釘で結合した底板がある。さらに、蓋は、C・D類のように段を設け、樺皮で結合するものが樺皮結合a類、E類のように段を設けず、樺皮で結合するものが樺皮結合b類に分類⁵⁾できる [第5図]。近畿地方では、前者は7世紀～8世紀初頭、後者は8世紀中葉～10世紀前半に使用され、形態による変遷を辿ることができる。樺皮の綴じ方は、樺紐を折り返して縫うことにより、樺の抜け落ちを防止する処置を施す「返し縫い」と、2列綴じの一種として綴じの最下段で樺を2列目に折り返して留める「返し留め」がみられる。

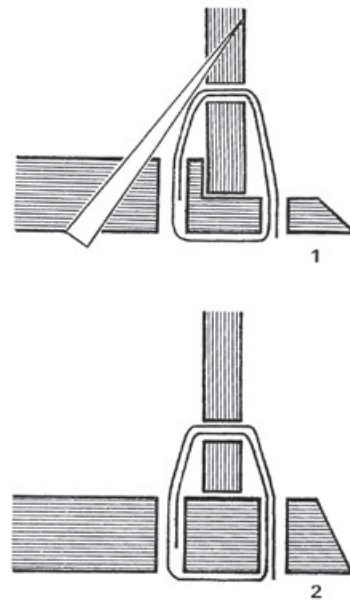


fig. 33 曲物の結合模式図

- 1; 樺皮結合曲物 a (7世紀～8世紀初頭)
- 2; 樺皮結合曲物 b (8世紀中葉～10世紀前半)

第5図 樺皮の結合方法
(奈良文化財研究所編 1985)

(2) 下曾我遺跡出土の曲物

國學院大學博物館に収蔵されている下曾我遺跡出土の曲物は、國學院大學考古学資料室が刊行した要覧に写真が掲載されている(國學院大學考古学資料室編 1973)。また、小田原市の発掘調査報告書には、國學院大學が実測した木製品の原因を再トレースした実測図が掲載されている(下曾我遺跡発掘調査団編 2002)が、第1次から第3次の調査図面などは、不慮の火災により大半が失われたため、詳細な出土状況などは不明のままだった(岡本 2002)。だが、岡本孝之氏が整理した調査写真や、遺物の注記⁶⁾を比較検討し、出土状況がある程度復元できた。

そこで、以下では、種類ごとに遺存状態の良い資料27点について報告をおこなう [表]。なお、図にかんして、小田原市の発掘調査報告書に掲載された資料は表に対応番号を示す。紙幅の関係上、未公表資料、及び出土状況の明確な資料を優先的に掲載する。

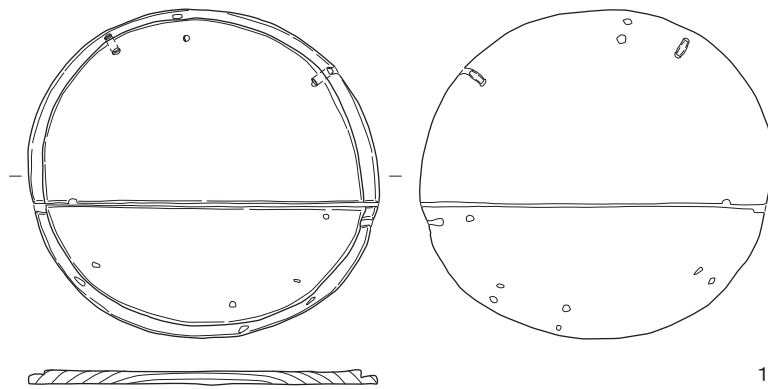
蓋 [第6図1～3・9] 報告する蓋は12点である。1～8が第1次、9～11が第2次、12が第3次調査時に出土した。特に1は、第1次調査時のAトレンチから出土している。1・2・5・8は完形だが、3・4・6・7・9・10・12は半分欠損している。法量は、3・9が28～30cm台、それ以外は直径16cm以下のものに分類されるもの、すべて小型品に含まれる。1・3～8・10は、側板と結合した樺皮が残存している。3・9は、外面に切削痕が多数みられる。2・5は、外面に文字が墨書されており、5は「方」

表 曲物観察表 〈〉は残存値

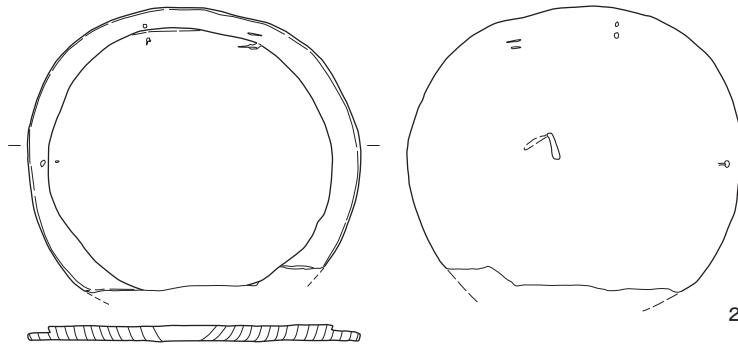
遺物 番号	種別	調査 年次	出土状況	注記	法量 (cm)			大きさ	周縁部 加工 形態	結合 方法	備考	要覧 (1973)	下曽我遺跡 発掘調査出編 (2002)
					長径	短径	最大厚						
1	蓋	1次	Aトレンチ	ソガ 1-5-K	16.7	15.5	0.6	小型	C類	a類	樺皮残存	30頁 桶底上段	30
2	蓋	1次	—	ソガ 17-K-13	15.7	13.4	0.5	小型	D類	a類	墨書	30頁 桶底中段	—
3	蓋	1次	—	ソガ II-8-K	28.3	〈13.1〉	0.8	小型	D類	a類	外面に切削痕 樺皮残存	—	—
4	蓋	1次	—	ソガ 19-K-14	14.2	〈8.3〉	0.7	小型	C類	a類	樺皮残存	—	17
5	蓋	1次	—	ソガ 19-K-9	15.7	14.1	0.4	小型	C類	a類	墨書「方？」 被熱痕 樺皮残存	—	20
6	蓋	1次	—	ソガ 18-II-10-K	14.4	〈4.9〉	0.5	小型	C類	a類	樺皮残存 被熱痕	—	31
7	蓋	1次	—	ソガ 18-1-56K	〈13.1〉	〈4.2〉	0.3	小型	D類	a類	樺皮残存	—	22
8	蓋	1次	—	ソガ 19-K-14	14.8	〈13.6〉	0.5	小型	D類	a類	樺皮残存	—	25
9	蓋	2次	—	ソガ2 K2-2	31.5	〈13.3〉	0.9	小型	D類?	a類	外面に切削痕	—	—
10	蓋	2次	—	ソガ2次 2-1-4	15.7	〈3.5〉	1.0	小型	D類	a類	樺皮残存	—	32
11	蓋	2次	—	ソガ2次 2-1-2	〈5.9〉	〈5.2〉	0.7	小型	C類	a類	—	—	34
12	蓋	3次	—	ソガ3 E-2	〈15.7〉	〈5.8〉	0.9	小型	C類	a類	—	—	27
13	曲物 側板	3次	3号井戸 付近(H14: 1号井戸)	—	25.1	23.2	0.4	中深形 小型 Ⅲ類	—	—	4段構成 樺皮結 合 外面返し縫い 2列内面返し留め	29頁 桶梓	37
14	側板	1次	—	ソガ 1II-13 K	〈5.1〉	1.6	0.1	—	—	—	内面ケビキ痕	29頁 檜物の 一部 右下	—
15	側板	1次	—	ソガ 1II-12 K	〈11.9〉	3.8	0.4	—	—	—	内面に被熱	—	—
16	底板	1次	Aトレンチ	20	14	〈8.3〉	0.8	小型	F類	—	釘結合	—	51
17	底板	1次	—	ソガ 18-?-5K	13.5	〈8.2〉	1	小型	F類	—	釘結合 外面に切削痕	—	—
18	底板	1次	—	ソガ 9.7-4K	〈10.9〉	〈2.7〉	0.1	小型	F類	—	釘結合	—	47
19	底板	1次	—	ソガ 19-K-3	13.7	〈5.2〉	0.5	小型	F類	—	釘結合	—	48
20	底板	2次	—	ソガ2 4-金-3	14.6	14.2	0.8	小型	F類	—	釘結合	30頁 桶底 下段左	39
21	底板	2次	—	下曽我2次5区4.2	18.6	〈14.5〉	0.7	小型	F類	—	釘結合	—	42
22	底板	2次	—	ソガ2 ウ-寄	12.6	〈6.4〉	1.4	小型	F類	—	釘結合	—	43
23	底板	2次	—	ソガ2次 T3-2層	14.4	〈4.8〉	0.6	小型	F類	—	釘結合 外面に切削痕	—	45
24	底板	2次	—	ソガ2 3-2	〈9.9〉	〈2.2〉	0.6	小型	F類	—	釘結合	—	49
25	底板	2次	—	ソガ2 5	12.3	〈2.9〉	0.6	小型	F類	—	釘結合	—	54
26	底板	2次	—	ソガ2次 T4-4層	17.8	〈7.1〉	1.1	小型	—	—	挿し穴の補填痕	—	52
27	底板	3次	—	ソガ3 ?-3	14.2	〈6.4〉	0.7	小型	F類	—	釘結合 外面に切削痕	—	55

と想定できる。5・6は、側面に被熱痕をもつ。周縁部加工形態は、1・4～6・11・12がC類、2・3・7～9がD類である。結合方法は、すべて樺皮結合 a類に相当する。

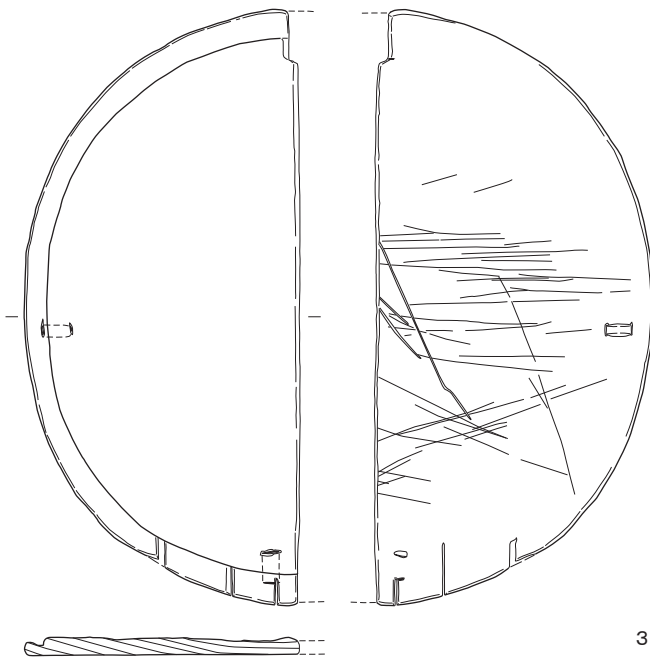
側板 [第7図 13～15] 報告する側板は3点だが、うち1点が完形である。完形の13は、3号井戸 [平成14年調査：1号井戸] の脇から出土した。楕円形を呈する。4段構成をなし、深さ10cm・口径25.1cm・最大厚0.4cmである。下から2段から3段目の帯部分にかけて、樺皮による結合が3箇所なされている。下から3段目の綴じ合わせは、樺皮を外側から挿し穴に挿入し、内面下方へ一旦折り返して外面に、次に外面上方に折り返して内面に至り、縫い始めの挿し穴を越えて下方へ順次縫っていく技法が認められる。また、最下段の綴じが2列となり、内面返し留めもおこなわれている。次に、下から2段目の綴じ合わせは外面から挿し穴に挿入し、一旦内面下方へ折り返して外面に至り、外面上方へ順次縫っていく技法がみられる。最後に、下から3段目のほかの結合部分よりやや離れた箇所の綴じ合わせは、外面返し縫いがおこなわれている。14は、楕円形を呈し、内面には0.1～0.5mm間隔のケビキ痕を全面的に斜格子状に施す。15は内面に被熱痕跡が全面に残る。



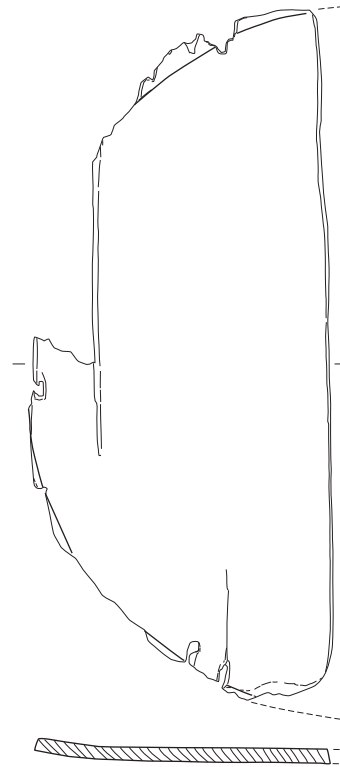
1



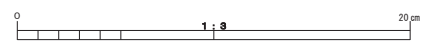
2



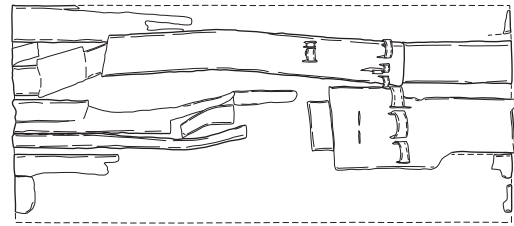
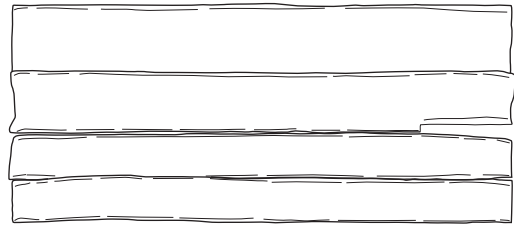
3



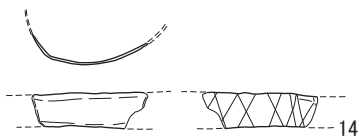
9



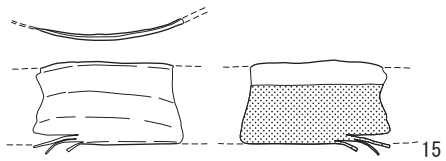
第6图 曲物 盖



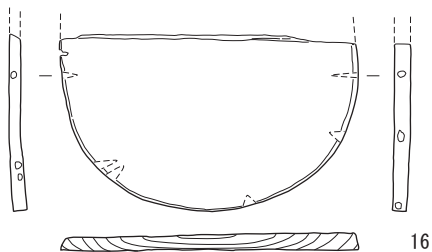
13



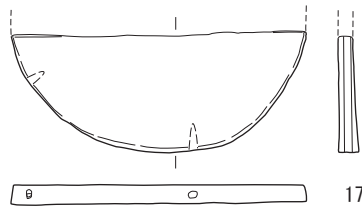
14



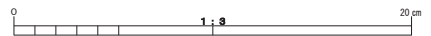
15



16



17



第7図 曲物 側板・底板

底板 [第7図16・17] 報告する底板は12点である。16～19が第1次、20～26が第2次、27が第3次調査時に出土した。特に16は、第1次調査時のAトレンチから出土した。すべての資料が直径16cm前後と小型品に含まれる。17・23・27は、外面に切削痕がみられる。周縁部加工形態は、26を除き、F類に相当する。

4. 曲物の位置づけ

(1) 曲物の用途と年代

以上、國學院大學博物館が所蔵する下曾我遺跡出土の曲物について資料報告をおこなってきた。ここでは先行研究を踏まえて、曲物の年代や、歴史的な位置づけについて検討していく。

分類 曲物の分類は、(1) 法量による分類(南 1991)と、(2) 周縁部加工形態による分類(奈良国立文化財研究所編 1993)、(3) 結合方法による分類(奈良国立文化財研究所編 1985)が挙げられる。

(1) の法量は、1～13・16～27が小型品(16～30cm)に相当する。特に完形の側板である13は、深さも判明しており、中深形に相当する。中深形で口径が25cm前後の13は、南分類の中深形小型Ⅲ類に該当し、井戸付近から出土したことから、水用の機能が想定できる。

(2) の周縁部加工形態は、蓋の1・4～6・11・12がC類、2・3・7～10がD類に相当する。底板の26以外がF類に相当する。

(3) の結合方法は蓋の1～12がすべて樺皮結合a類に相当する。

奈良・平安時代の曲物は、口径30cmまでの小型品と、口径34cm以上の中型品が多い(南 1991)。周縁部加工形態は、蓋がC～E類、底板がF類を主流とする。下曾我遺跡の曲物はこのような通有の事例と様相が共通し、年代的な齟齬はない。なお、近畿地方で、樺皮結合a類が7世紀～8世紀初頭、つまり飛鳥時代に使用されている。樺皮結合a類をとる1の蓋が、8世紀初頭の土師器と共伴する点も、概ね同時期であると想定できる。

出土状況 これらの曲物のうち、出土状況が判明した例は3点(1・13・16)である。

蓋の1・16は、岡本氏が整理した写真(岡本 2002)から、第1次調査のAトレンチから出土したことが判明した。これらの付近からは、8世紀初頭の土師器坏が出土している。

完形の側板である13は、第3次調査の3号井戸[平成14年調査：1号井戸]の脇から出土している。3号井戸の使用年代は、前述のように9世紀末頃～10世紀前半に相当し、3号井戸付近[平成14年調査：1号井戸]から出土した13も井戸の使用年代に近い可能性もある。

神奈川県教育委員会及び小田原市の調査時の曲物 なお、國學院大學の3回にわたる調査の出土資料のほかに、神奈川県教育委員会が所蔵する資料として曲物8点(神奈川県編 1979)が存在し、小田原市の調査の際にも曲物4点が包含層から出土している(下曾我遺跡発掘調査団編 2002)。これらの周縁部加工形態は、蓋がC・D類、底板がF類であり、國學院大學の調査時に出土した曲物と様相は概ね同じである。

(2) 曲物の位置づけ

遺跡との関連性 下曾我遺跡は、曲物のほかに、米の付札である可能性のある木簡、付札状の木製品、8～10世紀の墨書土器などが出土しており、相模国足柄下郡の郡家またはその関連施設と推測できる(横浜市歴史博物館編 2003)。周辺には郡衙、寺院と密接に関連する千代南原遺跡や三ツ俣遺跡が所在し、7世紀後半以降、郡衙などを中核とし、交易のための港津、祭祀をおこなう空間などにより構成されていたと想定される(荒井 2002、北田 2000)。そのような中で、井戸の付近では、「水用」に特化すると判断できる小型の曲物が出土している。このような状況が、多少なりとも埋没当初の様相を維持しているのならば、遺跡内の空間利用が具体的に復元できる可能性を示唆する。

周辺遺跡出土の曲物 また、下曾我遺跡周辺において、古代の曲物が出土している遺跡は、千代南原遺跡第Ⅶ地点が挙げられる(小田原市千代南原遺跡第Ⅶ地点発掘調査団編 2000)。この遺跡は、ほかに木簡が出土しており、郡寺的性格が強い遺跡と想定される。法量は、小型品が主流であり、周縁部加工形態がC類、結合方法が樺皮結合a類に相当する。年代は、火山灰の推定年代や共伴遺物から、8世紀初頭～中期頃である。以上のことから、千代南原遺跡では下曾我遺跡と曲物の様相が共通するとともに、小田原市の官衙・寺院関連遺跡において使用された樺皮結合a類の曲物は、近畿地方と概ね同時期か、やや降る時期には導入されたと考えられる。

5. おわりに

本稿では、下曾我遺跡出土遺物のうち、曲物の年代的な位置づけをおこなった。下曾我遺跡の曲物は大方が小型品であり、井戸付近から出土する点から、機能としては水用に使用したと想定できる。また、曲物の年代について、すべての資料に該当するわけではないものの、結合方法からみた編年観・共伴遺物の年代・周辺遺跡の曲物の様相がいずれも矛盾しないことから、曲物の蓋でかつ樺皮結合a類に相当するものは、8世紀初頭に使用されていたものとみて大過あるまい。

下曾我遺跡は、調査記録が僅かなため、実態が明確でない遺跡の一つである。そのため、國學院大學が収蔵する資料との照合から、本遺跡の実態を具体的に解明することが課題とされてきた(岡本 2002)。今回は、その足がかりとして曲物を取り上げ、下曾我遺跡出土遺物の実態解明に踏み出せたと考えている。今後は、土器やほかの木製品全般も視野に入れた出土資料の全般的な再確認が課題であり、合わせて木製品の年代同定や用途などの解明に向けて尽力していきたい。

謝辞

本稿の執筆に際し、実測図の作成にあたっては、北澤宏明氏に御助言を頂いた。末筆ながら深く御礼申し上げます。

註

- 1) 遺跡名称は、曾我病院・曾我病院裏遺跡・下曾我遺跡・下曾我病院遺跡・下曾我精神病院内遺跡・永塚遺跡などの異称が混在するが、本稿では下曾我遺跡(岡本 2002)に統一する。
- 2) 下曾我遺跡は赤星直忠氏が昭和35(1960)年4月2日に発見したが、金子皓彦氏はその前年の昭和34(1959)年に発見したという(岡本 2002)。
- 3) 昭和35(1960)年には、國學院大學の第1次調査を受けて、神奈川県教育委員会が調査を継続し、弥生土器片・土師器片・須恵器片・木簡・曲物などの木製品などが出土した。出土遺物は、神奈川県教育委員会所蔵の資料として神奈川県史に掲載された(神奈川県編 1979)。ここでの遺跡名は、下曾我精神病院内遺跡である。
- 4) 下曾我遺跡における古代土器の年代観は、國平健三氏のいういわゆる上浜田編年(國平 1986)に従う。
- 5) 樺皮の結合方法は、樺皮結合A類・樺皮結合B類と表記するが、(奈良国立文化財研究所 1985)周縁部加工形態の分類と混合のおそれがあるため、今回は前者をa類、後者をb類と表記する。
- 6) 下曾我遺跡出土遺物の注記は、調査年次順にソガ・ソガ2・ソガ3と表記されているが、ほかの記述はまだ不明な点が多い。

参考文献

- 赤星直忠 1965「小田原市下曾我遺跡」『日本考古学年報』13 168頁
- 荒井秀規 2002「小田原市下曾我遺跡・永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点出土の墨書土器」『下曾我遺跡・永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点』395～405頁
- 岡本孝之 2002「下曾我遺跡における調査研究史」『下曾我遺跡・永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点』207～280頁
- 小田原市千代南原遺跡第Ⅶ地点発掘調査団 編 2000『神奈川県小田原市千代南原遺跡第Ⅶ地点』
- 神奈川県 編 1979『神奈川県史 資料編20 考古資料』
- 北田裕行 2000「古代都城における井戸祭祀」『考古学研究』第47巻 第1号 53～70頁
- 國學院大學考古学資料室 編 1973『國學院大學 考古学資料室要覧 下曾我遺跡出土遺物』
- 國平健三 1986「相模型坯の成立過程をめぐる土器様相」『神奈川考古』第22号 309～328頁
- 下曾我遺跡発掘調査団 編 2002『下曾我遺跡・永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点』
- 田尾誠敏 2002「下曾我遺跡・永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点における古代の土器様相」『下曾我遺跡・永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点』349～363頁
- 奈良国立文化財研究所 編 1985『木器集成図録 近畿古代篇』
- 奈良国立文化財研究所 編 1993『木器集成図録 近畿原始篇(解説)』
- 西村 歩 1994「曲物の細部技法 一綴じ方を中心として一」『文化財論集』201～210頁
- 樋口清之・大脇直泰・山田 実 1966「神奈川県小田原市下曾我遺跡」『日本考古学年報』14 120～121頁
- 樋口清之・大脇直泰・山田 実 1967「神奈川県小田原市下曾我遺跡(第3次)」『日本考古学年報』15 191～192頁
- 南 博史 1991「曲物研究と課題」『考古学ジャーナル』第335号 13～17頁
- 横浜市歴史博物館 編 2003『「文字との出会い」—南武蔵・相模の地域社会と文字—』